

セレンディピティには

「幸運は用意された心のみに宿る」の精神が大事

二〇二四年受賞 服部 信孝博士

順天堂大学 主任教授

名誉ある武田医学賞を受賞する栄誉に浴し、「若手研究者へのメッセージ」を依頼されました。これまでの自らの歩みを振り返る良い機会と捉え、この文をしたためました。

私は一九八五年に順天堂大学医学部を卒業し、脳神経内科（神経学講座）に入局致しました。当時、主任教授はパーキンソン病（PD）の定位脳手術で著名な榎林博太郎先生（初代教授）であり、教室は神経生理学を主体としていました。私も神経生理部門に参加し、PDのH反射に関する研究の手ほどきを受けました。神経生理をライフワークにするものだと思っておりましたが、その後、教室の運営方針で国立療養所富士病院に赴任しました。そこでの約二年間の間に、シアリドーシスの病態解明やMタンパク血症と末梢神経障害に関する研究を臨床研修と並行して行う機会を得て、疾患に特化した研究の面白さを経験しました。この経験はその後の私の人生を大きく変えたとも言えます。

一九八九年に大学に帰局し、丁度二代目主任教授の水野美邦先生が赴任され、水野先生の助言もありパーキンソン病（PD）の発症機序に関する研究を大学院に進学して開始することになりました。大学院では、ミトコンドリア研究の我が国の中心であった名古屋大学医学部生化学第二教室（小澤高将教授）に国内留学し、この時にはじめて分子生物学を学びました。丁度その時期、塩基配列解析においてアイソトープ法からABI社の蛍光色素を用いる新たな塩基配列を決定する手法が日本に導入されたばかりであり、その方法の確立に立ち会えたことは貴重な経験となりました。

この時に私が進めていた遺伝子の構造解析で慶應義塾大学分子生物学の清水信義先生と共同研究を行ったことが縁で、清水先生の研究室に出入りする機会を得て、Keio BACライブラリーの存在を知り、PCRを数回行っただけでターゲットとするBACクローンを単離・同定できるシステムであることに驚愕したのを鮮明に覚えております。このライブラリーを利用することで若年性PDの原因遺伝子 parkin の単離・同定に繋がりました。また機能解析に関しては parkin のN末にユビキチン様構造を持つことから蛋白分解系に関わることを推測し、東京都臨床医学総合研究所（現東京都医学総合研究所）の田中啓二先生に相談し共同研究を開始して、parkin がユビキチンリガーゼであることを明らかにすることが出来ました。これらの成果は、一流の研究者との出会いと協力があつてこそ実現したものです。人の縁は大事だと思つづく思つております。

二〇〇六年に教授に就任し、常染色体顕性遺伝性PDの原因遺伝子 CHCHD2、Prosaposin を同定・単離することに成功出来ました。多くの論文を発表することが

出来たのも優秀な教室員の頑張りによる成果と思っております。人は財産との信念で教室運営をして参りました。また優れた国内外の共同研究者にも恵まれました。ルイ・パスツールの「幸運は用意された心のみに宿る」を実感することが多く、その通りだと思っております。

研究は、臨床現場とは異なります。目の前の患者さんに適切な治療を施せば結果が臨床症状の改善という形で分かります。一方、研究はたとえ方法が正しくとも、またやれば結果が出る代物でもなく、ストレスの多いものです。如何にそのストレスを克服して乗り越えるかが良い研究をする上で大事だと思っております。また、「セレンディピティ」を生むには先のルイ・パスツールの名言に結びつくと思っております。ですので、若い研究者との「フラットな“熱いブレインストーミング”的議論が多くの成果を生むことは間違いないと信じています。

臨床研究者として、「全ては患者さんの為に」の精神で研究を推進してきましたし、自ら臨床医として数多くの患者さんを診察してきました。私の外来を受診するために全国から患者さんが来院します。難病であるが故に多くの患者さんは初診時に涙を流して絶望感にひれ伏すことが多いのですが、常に数年以内には進行阻止可能な治療法を開発することを約束しております。そのような意味では、血液中の生物学的マーカーである異常 α -Synシードの発見とその異常 α -Synシードが疾患特異的構造を呈することも見出したことは、超早期診断の可能性と早期治療介入の臨床応用の実現を意味していると確信しております。

「全ては患者さんの為に」を志に今後も進行阻止治療の開発を実現すべくPD研究を

推進していく所存です。

”若き研究者よ、大胆にそして繊細に挑んで欲しい“を願っております。

「全ては患者さんの為に」

